

主として(阪本D式読書レディネスA号)(WISC、阪本D式、村山式)

調査内容 一、(1)子どもが初めて、読書出来るようになった文字

は、自分の名前の中の一字か頭文字である。

(2)名前がよく読めるようになった時は差が大きい。しかし、兄弟のある子どもは少し早く読み書きが出来るようだ。

幼稚園に行った子どもは、入園して一年〜三年の間にいろいろの方法を通して知る由か、平均数は、あまり変わらない。

(3)字の読めるのは、質問紙法でおこなったのでは、全部読める子どもが新入園児にも多い。しかし阪本D式読書レディネスでおこなった結果は前者と少々異なっている。平均数五五で反対の字(しを左右反対に書くように)と正しい字をはっきり知らないからであろう。

正しい字と解の字、あまり、まちがわれない字とがあるが、日本の数字は知らない子どもが多い。

(4)他のテストとの点の差は大きく、IQとは正比でないことを知る。

(5)子どもは何を通して一番よく知るか、と言えば、絵本、かるた、などが多いようである。

(6)興味をもって読んだカンバンには、たはこが一番多い。それは大体店がちらばっていて、どこの子どもでもそれを見られるからだと思う。

(1)父母の学歴と考え方

古い教育を受けた人の方が入学までに字を知っていなければこまる、また幼稚園で教えてほしいと希望する者が多い。

(2)家庭保育児は、幼稚園に行った方が今よりよく覚えるだろう

と言うのが多い。

結論 文字を知ることにより、言語生活が豊かになり、絵本を通じていろいろの知識を深めていく。それ故、よき環境を作り、子どもに興味のある時をよく知りその時期を上手につかみ、子どもを伸ばしてやるのが、母親、保育者に与えられたる大事な役割であると思う。(図表省略)

## 農村における児童の生活

日本女子大学 児 玉 省  
亀 田 紀 子  
高 神 弘 子

本研究は、過去四か年にわたっておこなっている農村児童の興味、態度、社会観、人生観、対人関係などの研究の一環をなすもので、本発表では、対象農村として八ヶ岳山腹と、高松市郊外の一村の子ども、小学四年より中学二年に至る両地とも約二百名の子どもを取り上げて、質問紙法によって調査し、他方、質問結果の信頼性を裏打ちするために両地で子ないし十五軒の農家を訪問して一、二時間の観察および面接調査をおこなった。八ヶ岳農村は寒冷地、高松郊外は温暖地農村の例として取り上げた。

(1) 八ヶ岳の子どもの活動種類はごく限られた数少ないものである。他地域との接触が少なく、村や字に文化機関が少ないし、農家の手伝いがかんりの労力を要求していることかこの原因である。

(2) 農繁期には一日に七時間以上の農業労働その他に従事するものが約40%もあるのに対して、高松郊外では農繁期でも一時間位が

75%である。しかるに勉強の時間をみると、高松では一日三〇分―一時間が58%、一・五時間ないし二時間が22%であるのに対して、八ヶ岳では一・五時間―二時間が35%、二・五時間―三時間が23%、三・五時間以上が25%にもなっている。

(3) 新聞のどこを読むかについては、両者ともスポーツが最大であるが、マンガについては高松が八ヶ岳の二倍もあり、国際問題、政治面については、八ヶ岳がうんと高い。

要するに片方は勤勉努力的で、地味で、社会国際問題に関心があつるものが多いのに対して、他方は心持ちが軽く、勉強もほどほどでマンガを楽しんでいる少年像を提起している。八ヶ岳では社会党支持が多く、高松では自民党びいきである。

(4) 「何が一番欲しいか」に対しては、両者ともテレビが第一、第二がお金。そのあとは旅行、映画館、本などが大いになく、両地ともほとんど同じである。

(5) 「東京をどう思うか」について「おもしろいところ」「働いてうんとお金がもうかるところ」では大いにないか、「おそろしいところ」でも八ヶ岳が多く、「東京の人はいらやましい」では高松が多い。前述の項目同様、両地域の子どものをよく示しているものと思ふ。

## 農村児童の知的発達

児 玉 省

日本女子大学 亀 田 紀 子

高 神 弘 子

対象農村は前演者と同一。子どもは二才―六才の就学前児童各約

一五〇名である。本研究は、三年前日本保育学会が日本の幼児の発達について標準化して、基準を使用して、両農村児童の知的発達を東京および全国平均と比較検討しようとしたものである。

(1) ことば関係「かなで書いて自分の名前がよめる」では八ヶ岳が最高(四七・五%)で、全国平均(三八・九%)より高く、高松が(三一・一%)で一歩低い。「かなで自分の名前が書ける」でも同様である。「花の名が言える」では、東京が最高、それから八ヶ岳、高松の順。「住所、年齢が言える」では、東京が一番高いが、全国平均その他ほとんど差がない。

(2) 数字関係「とばさずに五つまで言える」では高松がやや高いが、「……二〇まで言える」では八ヶ岳の方が高い。「指しなから数える」でも同じような結果かである。また指の数および(1+1+2)の簡単な計算では八ヶ岳が高い。

(3) 位置および時間関係「左右、たてよこの区別ができる」「今日明日の区別ができる」では八ヶ岳が高く、あと全国平均、東京、高松はほとんど同じ。ただし「自他のものの区別」では東京、高松、八ヶ岳の順である。

(4) 性別差、色の知識など 自分が男か女か分かるについては高松が(一〇〇%)で最高で、あと全国、東京、八ヶ岳は差がない。「お金をみせて何円か言える」では、全国平均が(七二・八%)で最高、それから東京、高松、八ヶ岳の順であるが、あとの三者間にはほとんど差がない。

(5) 運動的機能「はさみで紙がきれる」では全国、高松、八ヶ岳同一。ボタンがとめられる「ひもを片結びにできる」では、両農村とも全国平均よりかなり低い。「三輪車にのれる」「ブランコをこげる」など多少施設的なものについては全国平均が両農村より高い。しか